

ソードアート・オンライン ～幻想を紡ぎし者～

☆さくらもち♪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天才物理学者『茅場晶彦』が秘したもう一人の天才。

人々に知られる事なく歩むその先には一体なにがあるのだろうか。

目次

プロローグ	1
始まりの世界	5

プロローグ

2022年、人類は新たな世界を切り開いた。
現実世界とは異なる仮想世界と呼ばれる世界を。

仮想世界を作り出した天才物理学者『茅場晶彦』。

彼は『私だけではこれは成し遂げられなかっただろう』とインタビュウで答えた。

聞く人が聞けば多種多様に聞き取れる意味合いを残した。

曰く、茅場晶彦の開発チームの事だ

曰く、茅場晶彦の出資者だ

曰く、茅場晶彦ともう一人の天才だ

謎は謎を呼んだ。

茅場晶彦はその答えを告げることはなく、仮想世界を利用した世界初のVRMMORPGを開発する。

その名も『ソードアート・オンライン』。

先行テストとして抽選1000名にそのゲームを購入する権利を得れた人々は言った。

「本物の世界だった」

「仮想世界とは思えない」

「とても素晴らしい作品だ」

その評判からソードアート・オンラインを求めるゲーマーが続出。
開発会社としては、新たに9000個を販売する予定との事。

………

—————

テレビの電源が落ちる。

1人の少年がリモコンで電源を切ったからだろう。

「何処も一緒」

少年がネットやテレビ、新聞を見ても殆どが仮想世界についての記事ばかり。

1度は楽しめてもそれがずっと続けばつまらなくなるだろう。

現に少年はそれらに対する興味は一切失っており、テレビを切ったあとは自室へと戻って行った。

「あと……何日」

死人のように表情が無い少年がずっと待っているのは先程のVR MMORPGで賑わっていたソードアート・オンラインの正式サーバー開始日。

「早く3日、経たないかな」

ぽふつとベッドに倒れ込むとまるで死んでいるかのように眠りについた。

少年が目を覚ますと日の光が窓から差し込む。

日付を見れば1日経っていた。

「ん……」

本来であれば学生として学校に向かっている時間帯になり始めていた。

しかし少年にはそれは叶わない。

『姉ちゃん、行ってきまーす!』

「……少し顔見せたのが、いいかな」

隣から聞こえた元気な声を聞いて、外に出ても寒くない程度の格好をすると玄関へと向かう。

その途中で来客を知らせる呼び鈴も鳴っていた。

誰が来たのかも確認せずに玄関の扉を開く。

「あっ……!」

「……入ったら」

「うん!」

扉の向こうにいたのは可愛らしい黒髪の少女。

しっかりと手を入れられているのか髪も肌も綺麗で、中学生とは思えない美貌の持ち主だった。

「お邪魔するね?・天音」

「ん、どうぞ」

少女を家へと招きながらも今の時刻を見る。

まだ朝の6時半で、ここから少女が通う中学なら1時間ほどは余裕があった。

「んへへへ、久々に会えた〜」

「別に……久々ってぐらいでも」

「ボクにとっては久々だよ!」

「大袈裟だね」

天音と呼ばれた少年に会えたことが余程嬉しいのか、少女は幸せそうなおーラを放つ。

少女の名は『紺野 木綿季』。

天音の隣である紺野家の次女であり、幼馴染だった。

「んむ……」

最初の元気で打って変わって、話していると少し眠そうにしていた。

「ほら、おいで」

天音は自分の膝をポンポンと叩くと、木綿季はそれに釣られるように頭を乗せる。

「30分だけ」

「うん……」

「おやすみ」

天音とて分かっていた。

木綿季が天音を独りにさせないよう出来る限りここに来ていることを。

しかし学校では人気者でよく友達と一緒に姿を見れば天音という人間は汚点になってしまおうだろう。

だからこそ天音は学校に行かない。

幸いなことに天音の能力を買ってくれた人物から時折仕事なども貰っていた為にこうして生きていた。

「ありがとう」

天音にとって木綿季は特別だと自覚するのは遅くはなかった。

そもそも好いていない男の家に来るわけもない為にある程度は好かれてるとは理解出来ていた。

しかしそれを告げる事は無い。

「僕は悪い子だよ、木綿季」

眠っている木綿季の頭を撫でつけながら時間を見ればもうすぐこの場を出なければならなくなっていた。

「木綿季、起きて」

「ん〜……」

「学校遅れるよ」

身体を揺すると段々と目が覚めてきたのかとろんとした目が焦点を合わせていく。

「おはよう」

「うん！おはよう」

「行っておいで」

「行ってきます！」

ぱぱつと身だしなみも整えた彼女は天音に手を振ると家を出ていった。

そしてそれが木綿季にとっては最後とも言える長い期間だった。

始まりの世界

生活音すら聞こえない異様なほどの静けさの家。

そんな家で暮らす少年『天音』。

彼の目の前には大人ですらすつぽりと頭を包めるヘルメットのようなものがあった。

そう、これこそが茅場晶彦が生み出した仮想世界へと飛び立つキーアイテム。

その名も『ナーヴギア』。

「何も問題は、ないかな」

天音の住む家の環境はとても充実しているとと言えるだろう。

買い物に出なくてもいいように通販で頼めるようにされており、ネットワークや光熱に関しても高水準だった。

一人暮らしとして使うには天音の年齢からは手に余る程だろう。

「またね」

誰に向けて放った言葉なのか誰にも理解されないだろう。

少なくとも天音には何となく呟いた一言だったから。

ナーヴギアを被り、仮想世界へとダイブする為の準備も整った頃。

目を閉じて仮想世界へ飛び立つキーを告げる。

「リンク・スタート」

その瞬間、現実世界から天音の意識は仮想世界へと移行されていく。

虹色のような光景とともに内部情報とデータサーバーとの情報を整合するウィンドウがどんどん現れては消えていく。

《あなたのアカウント情報を入力してください》

最後に出てきたウィンドウはソード^Sアート・オン^Aラインのログイン画面。

「まあ……使っていいって言われたし、あれでいいかな」

元々持っていたアカウントがあるため、天音はそれを入力する。

《このアカウントでよろしいですか？》

《はい／＼いいえ》

迷いなく、はいを押す。

すると景色が変わっていく。

無機質な場所から段々と色付いた世界へと。

「久々」

そこは広大な空があり、周りは今の現代建築とは打って変わったファンタジーな建築。

魔法は一切存在せず、剣がメインで作られたファンタジー世界がこのSAOだった。

「さて……とりあえず動いてみよう」

「ねー！」

いざ動こうとすると天音に向かって声をかけてくる相手がいた。

見た目だけでいえば美少女と言える容姿だったが、SAOにおいてはそれは当てはまらない。

アバター制作で性別や容姿など幾らでも偽れる為に見た目が最も信用ならないのが天音の見解。

「……何」

だからこそ警戒心剥き出しで対応していた。

相手はそれを何事もなく受け流している辺り、慣れているのか気がついていないだけなのか分からないかったが。

「君ってこのゲーム慣れてるかな？」

「一応は」

「なら戦い方とか教えて貰ってもいいかな？」

「ん……いいよ」

現実世界とは違い、見た目などで差別されるような世界ではない。

だからこそこうして誰かに手を差し伸べる事も出来るようになってきたが、だからといって天音自身が人の選り好みをしてしまう嫌いがあるため、目の前にいる少女に対しても本当に天音の気が向いたただけに過ぎなかった。

「アマネ」
A m a n e

「ボクはユウキ」
Y u u k i
よろしくね、アマネ！

何となく、現実世界にいる幼馴染を思い出させるような少女に。
アマネは少しホツとしていた。

ユウキを連れてアマネは初期街の《始まりの街》を出ると敵モンスターが現れるフィールドにいた。

「わわっ！」

ユウキが相対するのは最弱モンスターのボア。

しかし最弱とはいえ戦闘出来なければ自身のHPが減らされてやられてしまう為、ユウキは出来るだけ直撃を避けていた。

「攻撃するチャンスを得たいならまずは相手の攻撃をしつかり見極めて」

「うん！」

「ソードスキルは特定の構えを取ればシステムが勝手に発動してくれる。だけどそれに甘えずに自分自身で動くようにすると最も威力を出せるから」

「分かった！」

相手の隙が生まれた瞬間を見てユウキは片手剣のスキルを発動させるとボアを一瞬で倒す。

「やった！やったよアマネ！」

たった最弱モンスター1体。

しかしそれを初めて相対したモンスターならばその価値は幾らでも膨れ上がる。

「反射神経が良いのかな？」

アマネはボアと戦闘している姿を見てそう思った。

仮想世界へ初めてダイブしたにしては異常とも言える反射神経の持ち主だった。

仮想世界は万人が扱えるものではない。

扱う前に仮想世界にダイブする為の適性が存在しており、その適性が良いほど脳で動かす際に仮想世界とのラグがない。

アマネはトップクラスでの適性を出していたが、ユウキも同等レベルの適性者なのだろうと結論を出す。

「おめでとう、ユウキ」

「ソードスキルって凄いな！一瞬でこう……シユババって倒せるんだから」

「それは相手が最弱モンスターだからだよ。普通は一撃で倒せたりしないから」

「えへへ、そうだと分かっても嬉しいんだよ」

「んじやそのまま戦闘に慣れよう」

「はーいー！」

戦闘中に変な癖がつかないようにユウキの戦い方を見ながら危険に陥れば手助けをする。

そんな事を続けていれば現実世界内では18時を過ぎようとしていた。

「ユウキ、もう18時過ぎてるけど……時間大丈夫？」

「あーもうすぐ晩御飯だ」

「なら落ちるといいよ。ここだと危ないからちゃんと街の宿内でね」

MMORPGと名を出しているだけあり、危険なプレイヤーも存在する。

ユウキにはその危険性を十分に説明しており、街の宿内という意味も理解していた。

システムによって宿の部屋内は基本的に安全なのでマイハウスを持っていないプレイヤーは宿を利用することになる。

「ねえねえ、アマネ」

「ん、何」

「ボク達フレンドにならない？」

「いいよ」

お互い初のフレンド故に1番上に表示されるがそんな事を気にする人物でもないので何事もなく申請し合う。

「まだまだ初心者だけどよろしくね！」

「こちらこそ」

そんな時、遠くの方から鐘が鳴る。
重く響く鐘の音が。

「何の音だろ?」

「……妙」

そしてアマネとユウキを包み込むような青白い光が突如現れる。
そしてこのエフェクトをアマネは知っていた。

「転移!?!」

「アマネ!」

ユウキが手を伸ばそうとしていたがそれは届かず、どこかへ転移されて行った。

それはアマネも同じく。

「こんなの知らない」

転移された先は初めてこの世界へ来た場所である《始まりの街》の中心部。

先程転移されたユウキの姿が見えない辺りはぐれてしまったのだろう。

「おい! 空見てみろ!」

誰かが空を見上げて伝えると転移されたプレイヤー達は空を見上げる。

空には赤く表示されたウィンドウが一つだけ明滅していた。

そしてそれは増殖するように広がっていき、空を覆い尽くすように真っ赤に広がった。

その隙間から垂れてくるように赤く粘性のある液体が流れてきて、空中で形作るように固まっていく。

やがて人の形を作ったそれは声を発した。

「ようこそ」

「私の名は『茅場晶彦』。この世界でゲームマスター権限を持ちうる者

だ」

大層な登場の仕方にアマネは何を言うつもりなのかをずっと待っていた。

「本題に入ろう。既に君たちはメニューから《ログアウト》ボタンが消えている事に気づいているだろう」

「だが、これはバグなどではない」

「もう一度伝えよう」

「これはバグではなく、ソードアート・オンライン本来の仕様である」

アマネはそれが確かなのかメニューを開いて一番下にあるはずのログアウトボタンを探す。

「……ない」

それは空に浮かぶ茅場晶彦が確かに伝えていた。

「君たちは何故？と思うだろう。何故、天才物理学者『茅場晶彦』はこのような事をしたのかを」

「私の目的は既に達成されている。現実世界とは異なるもう1つの世界を作り出し、そこへ君たちを招いた時点で」

βテスター達を含めたSAOプレイヤー1万人を仮想世界へ監禁するようなのこの行為に理解を示せる人間は正気ではないだろう。

しかしアマネはその行動理念に理解を失ってしまった。

「子供が抱くような夢ゆめまぼろし 幻でしように」

アマネとして幻想を抱いたからこそ。

それを具現化させるまでの道のりぐらい理解出来るからこそ。

この場においては不相応にも共感が出来た。

「この世界において君たちの身体は現実世界の身体そのものだと言っておこう」

「戦いを行い、そして君たちのHPが0になった瞬間、システムによって君たちのアバターは即削除されナーヴギアによって現実世界の脳は破壊されるだろう」

ナーヴギアに内蔵されたバッテリーや部品から人間の脳を破壊するのはとても容易い。

人間の脳は凡そ42度が限界とされているため、ナーヴギアに内蔵されているバッテリーを使い頭そのものを42度以上にまで温めれば破壊出来てしまう。

言わば小型の電子レンジがナーヴギアに入っていた。

「なお、外部からの脱出も有り得ないだろう」

「報道やネットによって伝えられている情報によって外部の人間によるナーヴギアの取り外しは絶対にはないと断言しておこう」

「現に忠告を無視し、数百名がソードアート・オンライン及び現実世界から永久的に退場している」

茅場晶彦が映し出したのは現実世界にて報道されているSAOPレイヤー達の内容、またそれによる死亡者などだった。

「さて、私から君たちにささやかながらもプレゼントを贈らせてもらおう。確認してみしてほしい」

あの茅場晶彦が贈るプレゼントにアマネはわくわくとしていた。

メニュー画面からプレゼントの中を開くと《手鏡》と表示されていた。

それを取り出す前に周りのプレイヤーを観察すると例の手鏡から溢れんばかりの光が出てきている。

「な、なんだこれ!?!」

「うわあああ!」

そうして光に飲まれたプレイヤーはたちまち姿が変わっていた。

「こ、これ!リアル顔じゃねえか!?!」

「おまえ、男だったのかよ!?!」

アマネは手鏡の効果がりアルの容姿にするものだと分かると取り出すのをやめた。

「それではソードアート・オンライン正式リリースのチュートリアルを終える。」

そうして茅場晶彦は空から消える。

それをキツカケにプレイヤー達は一齐に怒号を上げた。

聞くほどでもないアマネは興味を失ったかのようなその場を立ち去る。

「ユウキは……」

フレンドを開くとしつかりとオンラインと表示されている為、生きているのが分かった。

「……僕なりに戦い方と生き方は教えた」

だからこれ以上あの子に関わるのは止めようと。

アマネは決めると容姿を隠すためにフード付きのローブを手に入れると《始まりの街》を抜け出た。